

最優秀賞

泣き女

寺田勢司

5

優秀賞

へのへの茂次郎

疋田ブン

51

優秀賞

アゲハの記憶

山本博幸

87

〔選評〕小川洋子・平松洋子・松家仁之

内田百閒

岡山県「内田百閒文学賞」

129

136

138



《最優秀賞》  
泣き女

寺田勢司

〈著者略歴〉

寺田勢司（てらだ・せいじ）

昭和五十九年石川県生 大阪府在住

現職…自営業

受賞歴…第三十八回さきがけ文学賞 選奨

第四十回さきがけ文学賞 入選

第二十七回伊豆文学賞 最優秀賞

厳しいお産になることを、産婆のひさは覚悟していた。

産婦が息みに伴う唸り声をあげるたび、梁に括られた力綱がみしみしと音を立てる。引つ張られた綱のせいで屋根組が軋み、荒ら屋のごとき粗末な納屋は、今にもひしゃげてしまいそうである。

「遠慮しちゃあおえんで。山犬みてえに叫ぶんじゃあ、ほれ」

血が混じった破水で濡れた筵の上で、継ぎ当てだらけの粗末な搔巻を腰に巻いた産婦は、こめかみに青筋を立てて息んでいる。

ひさは焦っていた。

二度目のお産であるにも拘わらず、すでに一刻（二時間）を経ている。これ以上長引けば産婦の精も魂も尽き果ててしまうであろう。できるだけ早く子をひきあげねば、母子ともに危険な状態となるのは火を見るよりも明らかだ。

鼻を打つ魚油の灯りが産婦の額に浮かぶ玉のような汗粒を照らす。仄暗い建屋の隅には一本の蠟燭の灯火が揺れている。

「もう一息じゃけん、蠟燭が消えっしまう前にもうひと頑張りじゃあ。ほれ」

この国の女たちは、難産知らずと言いつたに、犬にあやかり、戌（西北西）の方角に向かってお産にのぞむ。だがそんな信仰の甲斐も虚しく難産と相成つた場合は、蠟燭に火を灯し、その灯火が消えるまでにお産が済むよう観音様に祈りを捧げる。

ひさも強く願っていた。

この赤子にはなんとしても無事であつてほしい、と。

「そりゃあ、頑張り、もう頭が見え隠れしようるけん」

手伝いに來ている近所の百姓の女子に、「そろそろじゃ。湯の支度しんさいよ」

と産湯の支度を言いつけたのであつた。

産婦の夫が宮部から坪井、久世辺りまでのお産を引き受けているひさのもとを訪ねて來たのは、半年ほど前のことであつた。

夫はひさの住まう家にやつて來るなり、「薬ゆう譲つてくれえや」とにべもなく言つた。

名子なごと呼ばれる百姓のなかでも一等貧しい身分であるこの男の家には一昨年いっさくねん、子をひきあげに行っている。元気な男の子であった。

医者でも薬肆やくしでもない産婆のひさのもとに薬を所望しに来る理由はただひとつ。この男の妻に新たな命が宿ったのだと察した。

あたかも腹下はらくだしに効く丸薬がんやくでももらいに来たかのごとく、呑気に、そしてのうのうと薬をよこせと言う態度が癪しゃくに障った。

「もうやめたんじゃ、作るんは」

そう返事をするのが、せめてもの抵抗であった。

「ほんなら裏手のありゃあなんなら」

ふらりとやって来たように見えて、家の周りをうろついて、庭の隅々まで周到のぞに覗き見していた男の抜かりなさに、背に手でも突っ込まれたような不快感を覚えた。

猫額ねこがくという言葉がふさわしい、ひさの家の庭の隅あやつこには、目も彩あやな赤い実をつける多年草が植え付けられている。

「ありゃあ宿場しゆくばの女のためのもんじゃ」

ひさが住む坪井の在所から程近い、出雲街道いずもかいどうの宿駅しゆくえきである坪井宿つばいしゆくと久世宿くせしゆく。公用の旅

行者を泊める御用宿から、他国の商人を泊める他国商人宿、通りがかりの旅人を泊める旅籠屋と、様々な客層に合わせた多種多様な宿が軒を連ねている。

宿の数だけ、そこには働く女が居る。

宿場で働く女たちは皆、様々な事情を抱えている。

ひさは止むに止まれず泣きついてくる宿場の女たちのために庭の草花を丹精込めて育てている。手前勝手な都合ではない。

「おめえさんの手え煩わせんためじゃがな。譲っちゃあくれんか？」

どこの男もそうやっていつも、もっともらしい耳当たりの良いことを言う。男たちが並べた御託を前にすれば、子を孕んだ女の身体のことや赤子のことなど二の次三の次なのだ。

庭先で風に揺れる、鮮やかな濃い緋色の実をつける毒草鬼灯。

本草の世では酸漿などと呼ばれている。夏の盛りに実をつけた鬼灯を根ごと引き抜いてお天道様に晒す。干涸びてすっかり生葉に姿を変えた干し草を細かく砕く。葉研なんでものは高価でとても買えないから、使えなくなった鋤の柄でもってひたすら叩く。身勝手な男たちの顔を思い浮かべながらひたすら叩きのめす。そうして出来上がった粉末を煎



じ、身籠った女子に含ませ続けければ、往々にして男たちが望む子墮しが成就するわけだ。

「なんなら、おめえさん」

帰って来た岩吉が名子の男に声をかけた。

岩吉は出雲街道で伝馬人足を生業とするひさの夫である。

「子墮しの薬ゆう貰いい来たんじやが」

ひさの表情を見て、状況を察した岩吉。小さく息を吐いて、

「ひさよう、分けちゃれえ」

と顎をしゃくって突つ慳貪に言い放った。

夫にこう言われては仕方なく、鼻紙に赤茶の粉末を包んで渡してやった。容量を違えると母親の身体に甚大な影響を及ぼす旨を囁んで含めるように伝え、飲ませ方についても事細かに言って聞かせたのであった。

その後どうなったのか、経過は預かり知るところではなかったが、こうやって呼ばれて子をひきあげるに至っているということは、薬石の効はなく、子は母親の腹の中で生き長らえたというわけだ。

だからこそ厳しいお産になることをひさは覚悟していたし、無事に産まれてほしいと

思っている。

ひさは赤子の頭を掴み首の向きを変える。

「さああとひと息じゃ。こつちゅう見んさい。うちの声に合わせて息め。さあいくでえ、せええの」

どこを見るでもなく視線を宙に漂わせていた産婦は、虚ろな目をひさに向け、再び丹田に力を込めた。

産婦の渾身の息みに合わせて頭蓋を引つ張り出すと小さな肩が覗いた。手伝いの女子に赤子が落っこちぬよう介助の指示を出し、ひさは産婦の背に手を回す。そして最後の息みを促した。唸り声に合わせもう一方の手で、産婦の腹を潰すように押し込んでやれば、無事に赤子が滑り出てきたのであった。

ツツジの木を焼く<sup>く</sup>て沸かした産湯で赤子の身体を洗い、手伝いに來ている近所の女子に肌着の着せ方を指南して赤子を託す。そして肩で息をする母親のそばに寄り、股座<sup>またくら</sup>を拭つてやってから、粉<sup>ちみ</sup>が詰まった<sup>かます</sup>吠<sup>い</sup>を背にあてがって、姿勢を整えてやった。

「元氣な子じゃ。よう頑張った。さあわかつとろお。こつからが正念場じゃけんな」

二度目のお産だからその辛さは身をもって知っているだろうが、なんとも氣の毒でなら

ない。励ますことしかできないのが歯痒い。

横になると血があがつてしまうことから、出産を終えた女子は身を横たえてはならない。産後からおよそ十日間、いつなん刻も、そしてながあつても座して過ごさなければならぬのだ。

お産を経験した女子は皆、産む辛さよりも、その後の座って過ごさねばならない日々のほうが辛かったと口を揃える。

ひさは母親を励ましながら手を拭い、納屋を後にして、夫たちが待つ母屋へと向かった。

縁側に座り、濁った酒を呷りながら知らせを待っていた夫は、ひさの姿を認めると妻の容態を気遣う素振りを少しも見せず、またお産の労をねぎらうことなども一切せずに、おもむろに赤子の性別を尋ねてきた。

女子じゃ、と応じると、夫の顔つきは暗がりでもはつきりとわかるほど厳しいものとなり、目配せをして家の裏手へと誘った。

月明かりも届かぬ真つ暗な家陰で足を止めた夫は、背後や辺りを確認すると、

「うちじゃあその赤子はよう面倒見切れんけん、里親探してくれえや。おらんのんなら

捨てるなり間引くなりしてくれえ。うちで七夜は迎えれんけんのう」

と声を忍ばせた。

こうなることは予想していた。

右を見ても左を見ても等しく貧しい坪井の里。回国の山伏は「この辺りは奥羽と並ぶほどに貧しい」と言い残していったとか。

今に始まったことではないし、数多の男の口から吐き出されたこの手の台詞を、幾度となく耳にしてきたひさの心は今更乱れることはない。

長大息した夫は続ける。

「あんたがこさえた薬が効きゃあ、ひきあげんでも良かったねえな。効きが悪いんじや。あんたもうちも、せんでええ苦勞が増えたんじや、薬の作りかたあ見直したほうがええで」

と当て言を溢した。

おめえはなんも苦勞してねえじやろ、と捲し立ててやりたい衝動に駆られるも、ひさは喉元まで込み上がってきた言葉を既のところで飲み下した。

「親心がついたら面倒なけん、とつとと赤子は引き取ってくれえよ。礼はあとで届ける

けん、頼むで」

「男子おのこじゃったらまだ良かったのう」と止とどめの捨て台詞を残して夫は踵かかを返し、闇に塗れていった。

遣り場のない怒りを携え、産屋うぶや代わりの納屋へ戻る。戸越しに赤子の元気な泣き声と、手伝いの女子と母親の話し声が聞こえる。

ひさは臍はそを固めた。

「此度は難産じゃったけん、この赤子はこれからの二、三日が山場じゃ。生きるか死ぬかの瀬戸際じゃけん、なんかあつてからじゃあ遅おそえ。うちが預かつて夜通し面倒みる。乳母も医者もすぐ近くにおるけん安心せえ。無事山あ越えりゃあ戻しい来るけん、あんたあ床上げに向けて養生しんさい」

誰とも目を合わせぬよう、努めて冷静に、そして淡々と言って身支度を済ませ、手伝いの女子から赤子を取り上げようとした刹那、つと目がぶつかった。

概ね察しはついているのであろう、手伝いの女子の表情には遣る瀬になさが滲み出ている。泣きじゃくる赤子を取り上げて戸口へと向かう。戸の引き手に指をかけた刹那、ひさを

呼び止める母親の声が戸内に響いた。その声音は切実なものであった。

顧みて見れば、母親の目には涙が溢あふれていた。その目からは、想いも溢あふれていた。

ひさは視線を逸よこらさずにはいられなかった。

「いっぺんだけ、いっぺんだけでええけん、抱かせてくれんかのう」

震える声と乞い願う母親の表情に、ひさの胸の底は深く深く抉えぐられ、腸はらわたは締め付けられるような痛みに襲おそわれた。

忌々いまいましい夫の残酷な言葉の数々が頭を過よぎり、ひさは心を鬼にした。

「いけん。お産の後は休むんがなによりじゃ。早う休め。ええな」

手伝いの女子に、母親の世話は抜かりなきように、と厳に言いつけて戸に手をかけた。

これから母親は産穢さんえを避けるために、ひと月ものあいだ、このぼろぼろの破れ屋で一

人、過かまじすこととなる。家族が使用する竈かまどや井戸に近づくことは許されず、もとより会う

ことも許されない。これからしばらくのあいだ、手伝いの女子だけが頼りなのだ。

どうか、励まし合い、支え合って乗り越えてほしい。そう願ひ、ひさは敷居またを跨またいだ。

戸を閉めると、粗末な土壁越しに激しくしゃくりを上げる母親の声が聞こえた。

満天の星空に悲痛な泣き声が響く。

わたしは拐かどわかしも同然どうぜんだ。

無情な口入屋くちいれやや女術ぜげんよりも質たちが悪い。

わたしは鬼だ。子を奪う鬼なのだ。

ひさは身をずたずたに切り刻まれるような想いを押し込め、逃げるように納屋を後にしたのであった。

赤子を引き取るとまず真つ先に、伝馬人足であり、津山城下つやまや久世宿に出入りする夫の岩吉に頼み、里親を探してもらうこととしている。

仕事柄、顔が広いからすぐに見つかることもあるが、名乗り出る里親がなければ、地下の大庄屋や城下の町役など裕福な家の門前に捨て子として置いてくることとしている。そこでおおむね見つかるはずなのだが、それでも里親が決まらない場合、郡代ぐんだいや町奉行の手配で里親が探される。子に恵まれない夫婦や人手の足りていない家などに引き取られて育ててもらふことになる。

最もおぞましいのは、里や城下のどこかに腹を痛めて産んだ子がいるのだと母親が思い込んで気を病んだり、錯乱することを恐れ、産まれてまもない赤子を亡きものにしてくれ

と家族から頼まれることだ。

濡れた手拭いを赤子の顔に被せたり、幾重にも折り重ねた綿入れを赤子の顔にあてがいができぬようにしたり、膝頭で赤子の喉を潰してしまふなど殺めかたは様々だ。

すぐに殺せと言わなかっただけでもあの夫は人の心を持ち合わせていたのかもしれない。

名子の家には、夜通しの介抱も虚しく、赤子は亡くなってしまったと伝えるつもりだ。

赤子を引き取った翌々日、坪井宿の町尻まちじりにある商家の遣いがひさのもとを訪ねてきて、

家主の母親が亡くなったことを告げた。

「すぐに向かうけん、あんたあ久世の手前の一里塚いちりづかのそばに茶屋があるけん、そのいっつさんに知らせんさい」

と言いつけ、早速支度に取り掛かった。

ひさの住む坪井の里では、ひきあげばあさんと呼ばれることもある産婆は、赤子のひきあげのほかゆかんに湯灌も請け負っている。

津山のご領地で人が亡くなると、地下であれば村の年寄としよりから大庄屋へと知らせが入り、



地域を差配する肝煎きまじりが指示を出して葬式の支度に取り掛かることとなっている。

町方も同様で、故人の住まい地を分担する保頭ほうとうと呼ばれる町役から町年寄まちどしよりへ、そして町を三つに分けて支配している大年寄おとしよりへ知らせが入り、葬式の手配が始まる。

坪井の里は拳母内藤家こゝもないとうのご領地であるため津山松平家の支配地でないものの、仕来りしきたは地域一帯で同じく、宿場の顔役が葬式の差配をすることとなっている。

遺族はなにもせずに留守居役るすいやくに段取りの一切を任せることとなっており、その留守居役の指図で遣わされた飛脚役の若者がひさのもとにやって来たわけだ。

半刻はんまじほど遅れてやって来たいつとともに遺族立会のもと、湯灌を滞りなく執り行った。

枕飯まくらめしの支度の手順や死者が寝ていた畳の洗いかた、湯灌に使用した道具の始末の方法などを道具役のものたちに指南し、座棺に入れて良いものなどを事細かに遺族に伝え、ひさたちは帰り支度を始めた。

「明日は何人来れるんなら?」

片付けに追われるひさのそばににじり寄ってきた留守居役は声を潜めて問うた。

「うちといっさん含めて全部で四人じゃ」

「二人一升いっしょうじゃけどええかのう?」

「なら門前で終わりじゃけどよろしいか？」

留守居役は眉間に皺寄せ顎を引く。

「慕われとつたばあさまじゃ。墓まで来んさい」

唐突な求めに、ひさは手を止める。

「一升じゃあ墓までは行けれん。無理じゃ」

留守居役の相好ににわかには憤りが滲んだ。

「なんならおめえ、足元見よつてからに」

不穏な空気を醸す二人のやりとりを傍らで聞いていた年嵩のいつが割つて入った。

「一升なら門前で終わりじゃ。これは昔からの仕来りじゃけん。文句があるんならご先

祖様に言うてくれんかのう」

加勢に根負けしたのか留守居役は、憮然とした表情のまま席を立ったのであった。

ひさたちは葬式の際に雇われる泣き女だ。泣き婆や弔い婆とも呼ばれている。

泣き女とは、葬式を取り仕切るものたちに雇われて、玄関口や門の前に座り、故人を泣

いて送り出すものたちのことを指す。

亡きものを悼んで流された涙は、故人にとってご馳走になると言われており、津山の辺

りでは泣き女を呼び、悲しみを深めることによつて遺族や縁者たちの涙を誘い、故人を送り出す習慣が根付いている。

三合泣きさんごうなきから三升泣きさんしやうなきまで、喪主の懐事情に合わせて様々な泣きかたを想定しており、一升を下回るならさほど泣かず啜り泣き程度、二升を超えれば野辺送りの列に加わって泣きながら墓場まで出張ではる。三升ともなれば遺族が家に戻るまでついて回ることとなつてい

る。湯灌に出向いた翌日の朝五つ（八時）、坪井宿の西の外れにある鶴坂神社つるさかじんじやに参集した産婆のひさ、久世の茶屋の店主いつ、坪井宿の旅籠の女中であるみや、香々美かがみの山立やまだちの妻であるとよの四人は葬式が行われている町屋へと向かう。

いつはひさの九つ年高の四十四歳。いつと同じ年回りであるとよは四十三歳、一等若いみやは二十三歳で、ひさはその間の三十五歳と年齢は様々だ。

戸内から往来にまで響く南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうを聞きながらひさたち四人は、町屋の前に並んで座り、支度に取り掛かる。通りに面して横一列で四人が座っている形だ。

「立派な仮門かりもんじやな」

いつは手拭いを冠りながら大戸の内側こしらに拵えられた藁の仮門を褒め立てる。

死者の出棺の際、棺は平常の門を使用してはならないこととなっており、町屋の場合は藁で編まれた仮門を拵え、大戸の前に据える。棺が仮門を潜り終えると、門火かしてびと呼ばれる火を起こして藁の門を焼き捨てるのがこの辺りでの慣わしだ。

「最近は歳のせい、これがねえといけんのだじゃ」

年嵩のとよが懐から取り出したのは、未だ青さの残る金柑きんかんの実。

「夏は柚子、冬は金柑じゃ」

とよはおもむろに金柑を指で潰す。

顎の下の結び目を気にしながら、頬っ被り姿となつたいつが茶々を入れる。

「なんならおめえ、もうこの稼業は潮時じゃねん。泣けれんのならもうやめえ」

とよと遣り合えるのは同年輩のいつしかいない。

「そうじゃとよさん、こないだの葬式もそりよう使うとつたじゃろ？ 周りは金柑臭う

てかなわなんだし、遺族も顔かお顰めとつたで」

旅籠の女中であるみやが同調し、加勢する。

「真面目に泣きよーるうちととよさんが同じ手当てなんは不公平じゃで」

責め立てられるとよはそんな批判もどく吹く風といった様子で、金柑の汁がついた指を